

# 檜の会

平成二十年  
夏 季  
第二十七号

NPO法人「檜の会」事務局  
京・東山やすい松小路  
TEL/FAX 〇七五五二五〇八〇三

## 国外から見た日本について

同志社大学文学部 安田 佳奈子

私はドイツで留学生生活を送る中で、海外からの視点で見た日本を肌で感じることが出来ました。現在、世界における日本の影響力は、国内で私たちが思い描いている以上に大きいものです。ゲーム・テレビを始めとする電化製品、自動車、漫画やアニメなども、今となつては日本のイメージに多大な力をもたらしていますが、やはり昔から彼らを惹きつけてやまないのは「独特の文化」だといえます。日本では、季節の変化に富んだ気候、多様な地形や海に囲まれた島国といった環境から多種多様な景観が生まれました。また、他国との交流は海を隔てており、諸外国の要素を取り入れながらも独自性を保持しやすい環境でもありました。以上の条件がそろう、魅力ある独特の文化が形成されたのです。

つい先日、大学の講義で日本と西洋の意識の違いに関する話を聞きました。内容は、日本人は様々な面で「間」を持ち、言葉で表せない感情を重んじるが、一方の西洋は言葉で表せるものに絶対的信頼を寄せるというものです。たしかに、日本文化において、言葉で明示できないものは数多くあります。例えば、私は授業で「芸者」について紹介したのですが、一番悩んだのは彼女たちが持つ意識を伝えることでした。芸者は立ち振る舞い全てに意味を持たせ、まさに生きた芸術とも言えます。しかし、その意識をびったりと表す言葉が見つかりませんでした。同様に、武士道や和歌、舞踊、庭園、絵画、華道、茶道などあらゆる面においても見てとれるでしょう。あえて言葉に当てはめない美意識が、他国の人々には珍しく映り、そして私たちが生まれながらに持つ感覚を理解された時、初めて本当の意味で日本人として見てもらえるのかもしれない。しかし、私は右記の様な日本人としての誇りを認識しただけではなく、同時に

皆様のご意見、ご投稿など  
お待ちしております。  
E-mail [BDJ503240@nifty.com](mailto:BDJ503240@nifty.com)

企画・編集／檜の会会報編集室  
発行／季刊（一・四・七・十月）  
<http://village.infoweb.ne.jp/hinoki/>

恥ずかしさも覚えました。海外の人々が日本を知ろうとしているのに、私を含めた日本人の多くは自国の知識を十分に持っていませんでした。私が出会った外国人達は、故郷をよく理解し、誇りを持っていきます。最近日本では、幼い頃から英語教育を取り入れたり、必要以上に海外の物や文化に価値を見出そうとする人が増えていきます。もちろん日本に限ったことではなく、私は悪いこととは思っていません。ですが、日本人としての基盤が形作られないままに行うのは、少し間違っているのではないのでしょうか。今後、ますます日本と世界間の交流が盛んになるにつれ、海外志向だけでなく、同時に国民の一人であるという認識を高めていく必要があると、私は留学経験を通して感じました。

## 豆知識

### ◆常磐津

常磐津は正しくは常磐津節という。江戸浄瑠璃を代表する一流派で、歌舞伎と深く関わりながら発展してきた。

常磐津のルーツは、享保十九年（一七三四）に宮古路豊後が始めた豊後節。これがなかなかエロティックだったようで、豊後節に浮かれて情交する者、駆け落ちする者、心中する者もいたとか。江戸文化の成熟気分にびったり合つて大人気になったが、扇情的な芸風に危険を感じた幕府は、元文四年（一七三九）豊後節全面禁止の御触れを出した。

豊後掾の門人の一人宮古路文字太夫が、豊後節のセクシーさを適当に抑えて、延享四年（一七四八）に一派を創設。常磐津文字太夫を名乗り、今日の常磐津の基を築いた。

以後、常磐津は間拍子が正確なことから、舞踊の伴奏音楽として広まる。また義太夫節の時代物的な要素を取り入れた豪快な大作も生まれている。幕末から明治にかけての最盛期には、芝居好きの旦那衆が暇にまかせて常磐津のさわりを口ずさんでいたという、良き時代もあった。

（文献引用：「古典芸能楽々読本」当会会員 井上由理子著）



### 三船祭に参加して

角田 恵美

夏を思わせる様な太陽に袷の着物が不似合な嵐山でしたが、三船祭に参加させていただき、心はずませ乗船いたしますと、いままでじっとり汗ばんでおりましたにもかかわらず、船の上は別世界で、ひんやりとした風が心地良く、山の緑の美しさと脇谷先生のお話に、しばし歴史を遡り、時を過ごさせていただきました。

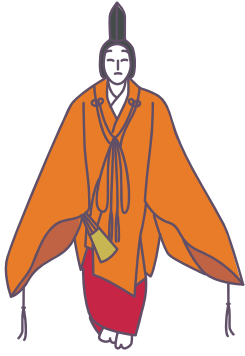
暫く致しますと、御神体がお船に乗られ、いよいよ神事の始まりです。(私達は脇谷先生の御説明のお蔭で少しは、理解が出来た様に思います。) 次に、お扇子流しが始まり他船は、皆競って船を近づけお扇子を取りに行っておられました。私達の船は双喜美先生のお蔭でゆっくりとお船の中に座ったまま、手渡しで頂く事が出来、大変幸運でした。

そして、いよいよ本番の放送が入り、舞楽の奉納、今様の奉納、謡曲の奉納と二十艘の船の奉納があり、私達の常磐津の船は、十七番目に奉納させていただきました。

厳肅な中にも優雅さがあり、特に双喜美先生の常磐津は、美しく清らかで、しばし幽玄の世界に身を置いている様でございました。

又、皆様の日頃のお精進が良かったせいか晴れやかな空で、お祭を終える事が出来ました。

最後に、双喜美先生のお蔭で、この様な厳かで美しい神事に参加させていただき、心より感謝致しますと共に御礼申し上げます。(当体会員・平成二十年五月十八日記)



### 第十一回「伝統芸能鑑賞会」 浄瑠璃系三味線音楽を楽しむ会

京都御所蛤御門前にある金剛能楽堂に於いてNPO法人檜の会主催第十一回「伝統芸能鑑賞会」開催に就きましては、会員の皆様始め諸関係各位の方々のご厚意とご支援ご協賛を賜りましたことを一同心より厚く御礼申し上げます。

当会の事業に込められております伝統文化の発展と育成事業の中で、次世代の方々に伝統文化芸能を身近に親しんで貰いたいという主旨の催しでございます。

京都府からのご依頼もあり、またご支援も頂ける運びとなりました事は、嬉しい中にも責任を感じております。府の文化芸術室からもお運び頂き、今回の催しの内容が非常に良かったと評価を賜りました。

大勢の学生さんに鑑賞戴き、休憩時間には番外で三味線と一弦琴の体験のコーナーを設けましたが、学生さん達の楽しい雰囲気非常喜欢に感じられましたね。」とお褒めを頂きました。「何事も続ける事が大切」この言葉の重みを受け、今後いろいろな場所を設け、浄瑠璃系三味線音楽をシリーズで企画させて頂き、皆様方に創造発信させて頂きたいと存じます。

今後ともよろしくご指導の程をお願い申し上げます。一言御礼のご挨拶とご報告を申し上げます。

特定非営利活動法人 檜の会  
理事長 安田 紀美子  
理事 一 同

### 「お知らせ」

#### ●檜の会主催

#### ◇夏季文学・歴史散策

— 湖北路 余呉湖と木之本(三味線の糸の見学) —

とき 七月十二日(土) (詳細は、折込み会報号外を参照下さい。)

#### ●会員情報

#### ◇お慶び

大西一叡様(一弦琴伝承者)が、平成二十年度京都市文化協会賞を受賞されます。なお、表彰式は、平成二十年七月七日(月)に行われます。

#### ◇訃報

四月十七日に井口洋二氏、六月十日に村松 茂氏が御逝去されました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

※ご意見ご提案お問合せは事務局までお寄せ下さい。  
※平成二十年度会員証を同封させて頂きます。